

# 1

[書評 | review]

## 国文学研究資料館編

### 『アーカイブズの構造認識と編成記述』

National Institute of Japanese Literature, *Archives no Kozo Ninshiki to Hensei Kijyutsu*

橋本陽 | Yo Hashimoto



国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』  
思文閣出版 / 2014年3月 / A5判 / 391頁 / 6,700円 + 税

本書は、国文学研究資料館による共同研究（基幹研究）「近世地域アーカイブズの構造と特質」（2010-2012年）の活動や議論の中で得られた成果をもとに執筆された論文集である。執筆陣は、歴史家でありながらもアーカイブズ学に取り組む研究者たちであり、多くは近世史の専門家である。これは、基礎となった共同研究の対象が「近世地域アーカイブズ」であったことの反映であろう。それに関わらず、本書は近世アーカイブズ以外を対象とした論考を半数ほど載せており、議論に多様性をもたせている。

序論において大友一雄氏により本書で取り組まれた狙いが提示される。それは「個々のアーカイブズの分析と、その理論・動向をつなごうとする試みであり、構造認識を前提に、編成記述に関する新たな展開のための可能性を探る」（4頁）[1]というものである。これを実現するため「構造分析の理論、編成記述の実現に関する研究・報告が充分とは言えない」（4頁）という課題を立て、この解決を図ろうと本書は次に挙げる二つの試みを行っている。それは「出所の組織や機能も曖昧で、いうならばゼロから分析を要する文書群を多くその対象として、構造分析、編成記述の手続きも含めより具体的な議論を試み」ること、「近世・近代から今日連続するような地域文書群、現代の個人文書など多様な文書群をとりあげ議論」を深化させることである（5頁）。「多様な文書群」の中には、現代の組織文書である大学アーカイブズも含まれている。

本稿は、近世史の史料群を対象とする論考がほぼ半数を占める専門書を、主として近現代アーカイブズの編成記述を専門的に学ぶ近世史の門外漢が検討したものである。論文集としての本書の性質から明らかなように一

貫した主題を論じた書籍ではないので、本稿では各論考の内容を紹介し、その都度私見を提示するという形式をとる。最後に本書全体の性格を包括的に論じることとする。紙幅の都合上、筆者にとって関心のある論考に重点が置かれている点についてはご容赦いただきたい。

## 2 ―― 各論考の内容と検討

「第一編 アーカイブズの編成記述 ―― 理論と動向」では「研究・動向の整理、課題の検出などと同時に編成記述の上で前提となる構造分析について理論的な整理」（5頁）が行われる。

太田富康氏（15-41頁）は、「いかに整理記述し、モノそのものをコントロールするべきか」という課題に焦点をあて、それに対して「主として近年刊行されている目録およびweb上の検索システムをとおして、編成記述のわが国における実態と動向を概観し、そこから課題に対する手がかりを考えようとする」（15頁）ことを目的に据える。その対象は、都道府県の文書館と公文書館（以後、一括して文書館）である。太田氏は、自治体文書館で印刷刊行される目録が氏の定義による「収集アーカイブズ」（35頁）のために作成されている事実を指摘する。近世アーカイブズを含む収集アーカイブズは、組織アーカイブズの編成記述と比較して性格が捉えにくく、そのため編成記述に大きな労力を要する。そのコストに見合った成果物として印刷費用をかけてまで目録が刊行されていると太田氏は主張する。そのような収集アーカイブズの編成記述の難易度を和らげるため、一つの提案がなされる。青山英幸氏の考え[2]を敷衍し、サブ・フォンドとシリーズを柔軟に解釈する一方で、太田氏が必ず存在すると考えるフォンドとアイテムの記述を標準化させ、同一出所の分散管理や横断的検索を可能にし、史料のコントロー

ルを達成するというものである。

この論考には、ISAD(G)の理解について留意すべき点が二つある。まず、太田氏は、ISAD(G)を「組織性を基本とする編成のうえにたつての記述を前提」(18頁)としているが、ISAD(G)には管見の限り一言もそのような言及はない。実際、ISAD(G)の第二版のAppendix Bには、John Smith FondsというPersonal Fonds、つまり個人文書のフォンドの記述例が挙げられているし、Papiers Bazaineに至っては、1808年という古くからの資料を含む個人文書の例である[3]。ISAD(G)自体においてこのような組織性に乏しい個人資料の事例が示されているため、太田氏の見解が当を得ているようには思えない。この指摘は、後述する柴田智彰氏と加藤聖文氏にも当てはまる。次に、ISAD(G)では記述について、「一般から個別へ進むという原則が、フォンド尊重原則の実践の結果である」と述べられており[4]、アイテム記述がシリーズやファイルのそれよりも先行する日本とは、その想定する編成記述の方法論がかなり異なっていることに注意すべきである。サブ・フォンドとシリーズを柔軟に設定するにせよ、原則として記述は、フォンドからアイテムへという順序を経るという立場をISAD(G)はとっている。日本において太田氏の議論は有効であることは間違いないが、以上のような前提条件については言及が欲しかった。

柴田智彰氏(43-70頁)の論考では、アーカイブズ編成が理論的に考察される。氏の考えによれば、「アーカイブズの内的秩序は、連続性と組織性から構成され」ており、その「編成論は、理論から実践にいたるまでを四つのステージで検討される」そうである(43頁)。柴田氏の定義する連続性の内的秩序とは「同一機能から作成された文書の連続性」であり、組織性の内的秩序とは「出所の機能分化

を反映した文書群全体の組織性」を指し、前者からはシリーズによる、そして後者からは階層構造による目録編成がなされる(45頁)。以上の前提に立ち、本論は第一ステージであるアーカイブズの内的秩序の構成理論の検討を試みる。ドイツの数学者であるヘルマン・ミンコフスキーの理論を取り入れながら、それぞれ連続性の文書反映率と組織性の文書反映率を指すDC率とDO率を数式によって表現し、ここに保存管理率なるKを掛け合わせ、文書群に残る内的秩序の割合を表す公式を定める。さらに、内的秩序には潜在性と顕在性があり、両者は内的秩序の接近に相当する構造分析に影響すると述べられる。構造分析にも、外部的構造分析法と内部的構造分析法の二つが存在し、これらを駆使することで、柴田氏によれば本来の内的秩序である文書作成時に自然発生する第一次的秩序への接近が可能となると主張される。

柴田氏の主張は、アーカイブズ編成論を研究する筆者にとって非常に興味深い。しかし、その難解さゆえに氏の豊かな思想が伝わりにくい。原因は、全員が共有できるような基礎的な知識から議論を発展させていない点にあり。例えば、シリーズの通常の意味は、本書の他の執筆者がISAD(G)から引用するように、「一つのファイリングの体系に沿って配列された、または一つの単位として維持された諸文書」であり、その生成された要因として「同一の集積過程もしくは同一のファイリングの過程、または同一の行為から生じた；同一の形態をもつ；作成、受領、使用に起因するその他何らかの関係性があった」という三点が挙げられる[5]。しかし、柴田氏はシリーズの定義を「同一の機能から作成された文書群の連続性」へと発展させている。また、柴田氏の言う第一次的秩序は「記録連続体」、つまりオーストラリアのRecords Continuumの

Creationに相当すると述べた上で(61頁)、この段階はメタデータの有無に関係がないという見解が提示される。しかし、Records Continuum を応用する研究者は通常、Creationの段階からのメタデータ付与を想定しており[6]、ここでも概念を独自に発展させている。このように議論が難解である問題の一因は、柴田氏が独自に発展させた定義と概念を議論の前提としている点にある。上で指摘したような基礎的な知識を柴田氏が知らないはずはなかろう。ミンコフスキーの理論の応用について見せた[7]ような基礎的な定義を出発点とする議論があれば、読み手の理解は明瞭になったであろう。しかし、理論の問題をここまで直接的に論じた論考は日本に数少なく、その価値は相当に高い。なお、出所の原則と原秩序尊重の原則は近現代行政整理から生み出された(64頁)という記述については、ダッチ・マニュアルの著者たちやヒラリー・ジェンキンソンが前近代の史料に力点を置いていた事実があるため[8]、誤りであることを付言しておく。

森本祥子氏(71-96頁)は、シリーズ・システムの基本を明快に説明する。さらには、恩給裁定原書という日本の史料を用いた適応事例も紹介しており、シリーズ・システムを使い史料を整理しようと試みる者にとって、必読とも言べき論考の一つである。今後は、森本氏の提示したモデルに従ったコンピューターによる検索手段の開発が期待される。

第二編は「アーカイブズの構造認識と編成記述論」であり、編成記述のケース・スタディを論じている。最初の三本は近世史の、後の二本は近現代の文書群を取り扱う。

近世史の史料群では、渡辺浩一氏(99-119頁)と西村慎太郎氏(121-147頁)が、史料群から確認できる組織をサブ・ファンドとして、サブ・ファンド内から確認できる機能を反

映する文書の集合をシリーズとして設定することで、近世の史料群を編成記述する過程を具体的に提示する。工藤航平氏(149-180頁)は、家がいくつかの町村を貫いて組合村の運営に関わることを機能として捉え、第一階層をサブ・ファンド、第二階層をシリーズ、第三階層を内容別に分類して整理し、各地域の特質を踏まえた編成項目を設定することを主張する。

諸論考ともに、近世の史料群の性質に応じた対処法を述べており、同様の問題に直面したアーキビストには非常に有用である。しかし、柴田氏と共通する問題であるが、ファンドを組織、シリーズを機能と解釈した前提条件が語られることはない。また、渡辺氏は太田氏も言及した青山氏の論考を議論の基礎に据え機能による編成を提唱しているが、青山氏の議論の根拠までは調べていないように見える。青山氏の機能編成論の根拠の一つとなっているCaroline Williams氏の論によれば、出所別の編成が不可能である場合には、機能別に資料群を編成することでサブ・ファンドに相当するサブ・グループとシリーズを一貫して編成することが可能となり、またそれはISAD(G)の主旨とも合致すると述べられる[9]。つまり、機能別編成は二次策であると説明されているのであり、どんな資料群に対しても機能別編成を施していいわけではない。もちろん、渡辺氏が取り扱った資料群を機能別に処理したことは間違いなく適切であったろうが、資料群の特質からだけではなく、アーカイブズ学一般の議論について今一步踏み込んだ上で、機能を重視する選択肢をとったと述べられれば、その正当性をより明確に示せたと思われる。ファンドとシリーズについてあまり言及のなかった他二稿も同様である。

近現代の史料群について述べるのは、加藤聖文氏(181-199頁)と清水善仁氏(201-225

頁)である。加藤氏は、近現代個人文書の編成記述を二つの史料群を素材として挙げつつ論じる。海外の事例も紹介しながら、シリーズを編成の柱に据えたプラグマティックな方法論を提示する。ここで挙げられる役職、業務、活動による編成案は、アメリカにおける個人文書の基本的な処理方法と合致しており[10]、氏が言うような精緻すぎる目録を作成する日本の状況に新たな視点を与えるもので興味深い。加藤氏とは対称的に、清水氏は組織文書である大学の史料群を取り扱う。京都大学を事例として、「大学組織の機能分析と大学文書群の編成記述に関する考察、アーカイブズ編成の理論と実践における機能別編成の可能性を模索」(202頁)している。京都大学の文書を組織アーカイブズと収集アーカイブズに大別し、それぞれに対する編成記述法を検討している。前者は、渡辺氏と同様に青山氏の考えをもとにフォンドとサブ・フォンドを組織別に、それ以下を機能で分類し、後者は加藤氏と同様の手法をとることを推奨している。気になった点を挙げれば、清水氏もまた基礎的な用語を本来の意味から発展させた形で利用していることである。例えば、太田氏のように組織アーカイブズと収集アーカイブズを元々の定義から異なった意味で解釈したことへの言及がない[11]。フォンドレベルに事務文書、個人・団体文書などが設定されている点も、元来のフォンドの意味と乖離している(220頁)。また、個人的に期待していたのは、アメリカの大学アーカイブズを大きく進化させたHelen Samuels氏の議論[12]の日本への適応であった。彼女に対する言及が一切なかったのは、大学アーカイブズの論考としては聊か惜しいという感想をもった。

第三編は「近世の記録管理とアーカイブズ」として、「組織・機能の構造分析、編成記述の実現にかかわり、文書群または個々の文

書をいかに理解するべきか、発生母体の性格・活動、記録管理、文書認識、料紙使いなどの観点から検討した」(9頁)のものである。史料群を取り巻くコンテキストの分析に焦点があてられる。

大友一雄氏(229-257頁)は、転封が大名のもつ記録にいかに影響したかを描く。西向宏介氏(259-289頁)は、近世と近代における商家の記録管理の有り様を追求し、それを公的・私的領域の中に位置づけている。山崎一郎氏(291-317頁)は藩士家文書、特に御判物・御証文が、いかに保存管理されてきたかを論究する。東昇氏(319-344頁)は、神人文書を取り扱う。管理主体の身分変化とそれに伴う文書の移動の分析を通じて、それらと神人身分・文書認識の関連性を明らかにしている。この中では、特に山崎氏の論考にあった十四の主題と十五の櫃で管理された寄組堅田家の文書群が、物理的に原秩序を表したと想定可能な事例で興味深い。第三編最後の青木陸氏(345-387頁)は、近世期の史料群を対象として保存科学を用いた素材の分析を試みる。非破壊調査方法を導入し、史料の形態別に科学的な分析を行い、それを編成記述に応用するための展望を示す。近世史と保存科学に精通した青木氏ならではの論考であり、今後の研究が待ち望まれる。

以上、後半は駆け足で本書を概観した。最後に本書全体を論評する。

### 3 — おわりに

本書のキーワードの一つに「構造」が挙げられる。しかし、幾度となく使われるこの単語について、本書における意味が明示されることはない。始めは原秩序をイメージしたのであるが、その理解はどうやら違ったらしい。原秩序尊重の原則とは、ICAの定義によれば、

既存の関係性と証拠的重要性、およびアーカイブズの作成者の検索手段の有用性を保存するため、一つの出所のアーカイブズはその作成者が設けた配列を保持するべきだという原則<sup>[13]</sup>

である。この定義の中から構造に該当する箇所を求めれば、それは「(アーカイブズの)作成者が設けた配列」であろう。本書の事例では、先述した寄組堅田家の文書群のもつ秩序が想起される。しかし、本書の論者の多くは、構造をアーカイブズの作成者が果たした機能として捉えているように見える。むしろ、その作成者がそもそも機能別に記録を配列していたという保証がないことは充分に認識されているのだろう。本書が向き合った課題の一つには、秩序のない、あるいは残っていない史料群の編成が挙げられていた。従って、その編成は、原秩序の復元ではなく、アーカイ

ブズ作成者の有した機能を綿密な内容及びコンテキストの研究から導きだし、その機能に合わせて史料を配列し直すという過程となる。この機能の中に見出される構造は、文書群固有の配列を示す構造とは区別されるはずである。このような見解が本書の「構造」の概念に合致しているかどうか定かではないが、間違いなく本書の支柱ともいべきこの言葉について説明がないため、読み手として議論の前提を共有することに苦勞した。同様のことは、アーカイブズ学の術語を本来とは発展させた意味で論じる幾つかの論考にも当てはまる。

とはいえ、本書には、明確な秩序のない文書群の具体的な処理手順を多くの事例とともに提示する力作が揃っており、それらは日本の編成記述論の到達点を表している。本書が編成記述を担当するアーキビストにとって座右の書となることは間違いない。

1 — 本書の引用箇所は(○頁)と記す。

2 — 青山英幸「国際標準 (ISAD (G) 2nd/ISAAR (CPF) 2nd/ISDF) による組織構造体と機能構造体としてのフォンドの統一的把握 — アーカイブズ・レコード・マネジメントにおけるアーカイバル・コントロール構築のために」、『アーカイブズ情報の共有化に向けて』、岩田書院、2010年、123-160頁

3 — International Council on Archives, *ISAD(G): General International Standard Archival Description, 2nd ed.*, Ottawa: ICA, 2000.

4 — 同上、p.8

5 — 同上、p.11

6 — 例えば、McKemmish, Sue, Glenda Acland, Nigel Ward, and Barbara Reed, 'Describing Records in Context in the Continuum: The Australian Recordkeeping Metadata Schema', *Archivaria*, vol.48, 1999, pp.3-37

7 — 但し、ミンコフスキー論文の出典が論文名は日本語でありながら書誌情報がドイツ語で記されている点(69頁)については不可解である。

8 — Cook, Terry, 'What is Past is Prologue: A History of Archival Ideas Since 1898, and the Future Paradigm Shift', *Archivaria*, vol.43, 1997, pp.20-26. なお、この塚田二郎氏による日本語訳は、『入門アーカイブズの世界 — 記憶と記録を未来に』、日外アソシエーツ、117-186頁、に載録。

9 — Williams, Caroline, *Managing Archives: Foundations, Principles and Practice*, Oxford: Chandos Publishing, 2006, p.78

10 — Roe, Kathleen, *Arranging and Describing Archives and Manuscripts*, Chicago: Society of American Archivists, 2005, p.59

11 — 太田氏の論考は、注3(35頁)においてこの点を正確に指摘しており、対称的である。

12 — 代表的なものに、Samuels, Helen, W, *Varsity Letters: Documenting Modern Colleges and Universities*, London: Scarecrow Press, 1998.

13 — International Council on Archives, ICA Terminology Database, 'Respect for Original Order', <http://www.cisra.org/mat/termdb/term/311>, (2014-10-06アクセス)